
利己主義な僕と彼女の事情

aoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

利己主義な僕と彼女の事情

【Nコード】

N4381M

【作者名】

a o i

【あらすじ】

はじめに

暗い男の子と明るい女の子のお話し。文中に自害を連想させる描写がありますが、作者は自害を肯定しません。拙い文章ですが、それでも宜しい方は考えて読んで頂ければ幸い。

雑用係の僕の事情

生きてるのがとても億劫に思えた。こんな自分消えてしまえばいい、そんな子供の様なことをずっとずうと考えていた。考えたところで消える訳がない。僕は何がしたいんだろう。星空を見て、青空を見て、空は広い、地球は蒼いと言う人間が居る。当たり前のことだろう？？と言いたいところだけど、一体誰が決めたって言うんだ、それが当たり前だということ。常識って意外と常識じゃないんだよ、と誰かが言ってた。誰だっけ、そうだ、クラスの中心人物佐藤さんだ。佐藤麻奈。僕はこの人が苦手だった、苦手というよりも近寄れなかった。

いつも周りには誰かが付き添い、男女共に人気のある。告白されていることも度々見ていた。それだけならまだ良かったものの、僕の得意とする嘘笑いを彼女は見破った。「笑いたくないなら無理に笑うのやめたら？」と。クラスの誰も僕には見向きもしないのに、佐藤麻奈は僕に気付いた。委員会を決める時に、面倒臭い役柄をよく押し付けられる。云わば嫌がらせというやつだ。便所掃除、先生からの雑用、教室の窓ふき、それらを僕は笑顔で応じた。佐藤麻奈以外の奴は僕のことを『都合のいい暗いクラスメイト』としか思っていないだろうに。佐藤麻奈はそんな僕に気付いた。

左右対象でない彼らの事情

ある日のことだった、いつものように僕はクラス男子に頼まれたゴミを捨てに焼却炉まで歩いてるところで。佐藤麻奈だ。本能がそう反応して、とっさに近くの端へと寄る。早く居なくなってくれ、そう心の内でぼやきながら、彼女が去っていくのを確認したところに出ていくとふいに肩を掴まれる。ヤバい。「大宮聡介くん、なんでそんなとこにいんの?」少し威圧的な言葉に、力は無いが離すまいといった掌が肩に押し掛かる。

「どこにだつていいだろう」そう冷たく言い掌を片手で払うと、佐藤麻奈は眉の間に皺を寄せて怖い顔をした。関係ない。放っておいてくれ。そんな意味を込めてもう一度手を自分側へと引いたら、おかしい。微動だにしない。佐藤麻奈は僕の腕を掴んでいた。なんで?と今度は僕の顔が歪む。

「なあんだ、意見言えるじゃない」飄々と彼女はそう僕に放つ。ああ、またしても彼女に僕が一つバレてしまった。

好奇心旺盛な彼女の事情

大宮聡介は不思議な男の子でした。普通はやりたくない仕事を自らこなし、男子ならサボりがちの階段掃除だって教室の床掃きだって何でもやる。でも別に人を求めているオーラは感じない。なんなんだろうか、あの死んだ魚のような目をした男は。クラスのゆかちゃんもみなみちゃんも口を揃えて気持ち悪いって言ってるけど、私は気持ち悪さよりもどこから活力が湧いているのか、彼のエネルギー源がなんなのか不思議でならなかった。

気になってしまうと堪らない性格故に、大宮聡介を観察してみる。ふむふむ、彼は一般的な右利きでお弁当が豪華。だっておかずは冷凍食品がないもん。エビフライが二本も入っているのに、大宮聡介は一つ目を半分くらいまでかじり、戻した。家庭環境になんかあるとか？まあ、あんまりジロジロ見るのもバレてしまうし、今回の大宮聡介観察は終了とする。と自己で解決して、私は大好きなハンバーグを口の中に入れた。ああ、今日も幸せだなあ。

攻撃的な彼女の事情

大宮聡介観察二日目。今日もお弁当は豪華、ハンバーグ弁当らしい。チーズがのつてるからこつてりが好きなのかなあ。今度は先生に言われたように作業をする奴をこつそりと覗き見ている。「ありがとうございます」声色は明るいんだけどなあ…なんでかしくり来ない。むずむずする、こつやって行動を起こさないのは性に合わない。話し掛けてやるう、そう思つて大宮聡介に話しかけてみた。「大宮聡介くん」逃がさない。肩をがしりと掴んで。「どうかしましたか?…えーと、佐藤さん?」大宮聡介はあたしを思い出したような素振りを見せて、にっこりと笑つた。「笑いたくないなら無理に笑うの辞めたら?それ、嘘笑いでしょ」

大宮聡介は一瞬びつくりしたような顔をしたけど、否定もさせないままに私は話す。「本当の笑い方はね、最初に口が笑うの。そして次に目が細まる。大宮くんは目と口が同時に動くに加えて片方の口許が歪んでいる」

聞いたことがある。とある誰かの人類学者が情緒的な表情は左右対象になり意識的または意図的な表情は左右非対象になる、と。ちょっと本を読んだだけだね。大宮君は案の定固まつたまま動こうとしない。もう一回言おう「笑いたくないなら無理に笑うの辞めたら?」

悲観的な彼の事情

暴かれる気がした、この佐藤麻奈という女には。僕の、隠し持っている闇を。怖かった。地味でいいんだ、都合良く使われて何もなく友達も出来ず、勿論恋なんてしなくて。地味な大宮聡介で良かったのに。なんでこうも見つけるんだ。気持ち悪い、辞めて欲しい。多分只の遊び半分であろう佐藤麻奈の表情に苛立ちを感じながら、今度は真顔で言ってる。

「これからゴミを捨てに行くんだ。退いてくれ」

「そついう雑用とかもさ、自ら買って出てやっているの？」

「…関係ないだろ」

「教えてくれてもいいじゃない」

「じゃあ、此方から聞くけどさ。何で僕に構うの？」

「この世界に美しいものなんてない。」

「興味があつたからよ」

あるのは孤独な空虚と大人達が上手くやろつとしてる陰謀だけ。ま
っさらに美しいものなんてない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4381m/>

利己主義な僕と彼女の事情

2010年10月28日01時03分発行